



愛郷無限

2014年10月14日号 NO.496

写真提供:大仙市

土屋館  
どや  
だて 通信

発行者：大曲・花火通り商店街  
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035

tuck-t@akita-tsujiya.jp

## Subject：大仙市ふるさとフェア in 東京有楽町

昨年秋、大仙市単独としては首都圏で初めの【ふるさとフェア】が開催されました。芸能・祭り・物産・観光とテンコ盛りで、首都圏の皆さんへ大仙市を大々的にPRできました。私たち大曲納豆汁旨めもの研究会も大曲納豆汁で応援参加させていただき大盛況・時間前完売。首都圏大曲会（県人会）の皆さんからは事前の宣伝だけでなく、当日の運営強力も含めて絶大なる応援をいただけたことも特筆すべき点でした。

本年も今週末11月18～19日の二日間、東京有楽町で【大仙市ふるさと物産フェア】として開催されます。今回は大仙市商工会と大仙市役所の主催、大仙市観光物産協会の共催となり、昨年より規模は小さく物産販売と観光PRが主となりますが、しかし継続事業になって本当に良かったと思います。継続すること、そしてその間にノウハウを蓄積し、人材育成をし、人脈を形成することは観光と物産にとっても重要だからです。なぜなら観光業は組織以上に【人】で繋がり広がるものだから。

これまで大仙市はこのような観光物産PRで他市町村の後塵を拝してきた感がありましたが、昨年の観光物産協会統合以降、第一回ふるさとフェア開催から動き方が変わってきたことを本当に嬉しく思います。

大曲商工会議所には食品関連業部会という食品生産・販売会社の部会があり、今回はそのメンバー企業も自社の製品を持参し参加することになりました。

この厳しい地域間競争の中で、外にモノを売っていくことは生き残りの当然の選択肢の一つとなっていますが、大仙市は一部の意欲的な会社を除き、食品加工・販売共に製品・手法共にまだまだ遅れているのが現状。その根源は【魅力あるモノ】を持っていないからではなく、あくまでも意識の問題であることは間違いありません。ベースとなる素晴らしいものは沢山あるものの、磨きの意識と努力が足りないのです。

部会では、この春から北都銀行系あきた食彩プロデュースのアドバイスとサポートををもらいながら、経営者意識へ問いかけ、商品のブラッシュアップに繋げるための活動をしてきました。今回は自分自身の手で実際に首都圏の方へ直接モノ売りをする事により、昨今の消費者の求めるモノと自社製品への反応を確かめて今後活かすと共に、さらに他自治体のアンテナショップを視察し学ぶ予定です。

後発であればこそ先達からどんどん学ぶことができます。決して卑下すること無く、真似るべきはどんどん真似て、採り入れることはどんどん採り入れていきましょう。

まったく同じ日程でB-1グランプリ in 郡山が開催されるため、大曲納豆汁旨めもの研究会が有楽町で大曲納豆汁を提供することは叶いませんでしたが、B-1グランプリ同様に有楽町のフェアも盛況になって欲しいものです。